

山の物語 角のある人 (三)

永代美知代



百合子は角のある怪物を見て、キャツと叫んで氣絶した。

するとその怪物は、谷川の水をすくつて百合子の顔に振りかけた、まもなく百合子が息を吹きかへすと、ふしぎにも鬼のやうな怪物は、ついと立ち上りざまに百合子を抱いて、ちやうど人間が走るのと同じやうに駆け出した。

斯うして怪物は、坂をのぼり谷を傳ひ、茨、熊笹、這松などの一杯に生ひ茂つた徑もない山の中を、自由自在に横に折れて、前に進んで行つた。百合子は「もう何處へでも連れて行け！」

と、仕方なしに諦めた。とてもとても逃げようとして逃げられるものでもなし、もがくだけが損だと、自棄半分の諦めではあるが、あきらめてしまふと、案外氣分が落ちついた。そして静かに行く手を見ると、前方の森をすかして、幽かに燈火らしいもののがちらついた。

「また目玉の光る鬼かしら？」  
はじめの内はさうも考へたが、だん／＼間近くなるにつれて、それは全くの燈火であると解つた。こんな山の中に家があらうとは思はれないけれど、百合子はお伽話で聞いた深山の奥の一つ家の不思議

な仙人でも居てくれて、その白髪童顔の仙人から助けられたくて仕方がなかつた。聲を立て、助けを求めて見ようかしら？ 併し、併し、もし反対にそれが山賊の棲家であつたら困つてしまふ——百合子とはつおいつためらつた。

途端、怪物が「歸つたぞ！」と怒鳴つた。

それは意外にも人間の聲である。オヤと思ふ間もなく、

「お歸りなさいまし。」

「お疲れで御座いませう。」

といふ聲が、つき／＼に聞えた。見ると、顔一杯毛むくじやの、鬼のやうに角のはえた、目玉の光つた男ばかりが四五人、怪物の前に 踞つて居る。

「やつぱり鬼だ！」

百合子はがっかりして、そのまゝ其處へ倒れてしまつた。

烈しい恐怖と疲勞のために卒倒した百合子が、再び眼を開いたのは翌日の夕方であつた。氣がついて

見ると、純白の敷布を垂れてベツトの上に寝かされて居るので、百合子は驚ろいた。

「お目覚めですか。」  
と、やさしい聲に呼び掛けられて其方を向くと、そこには髯むくじやの男達が五六人、椅子に腰掛けて此方を見入つて居るのであつた。

「おゝ！」百合子は思ひ出した。

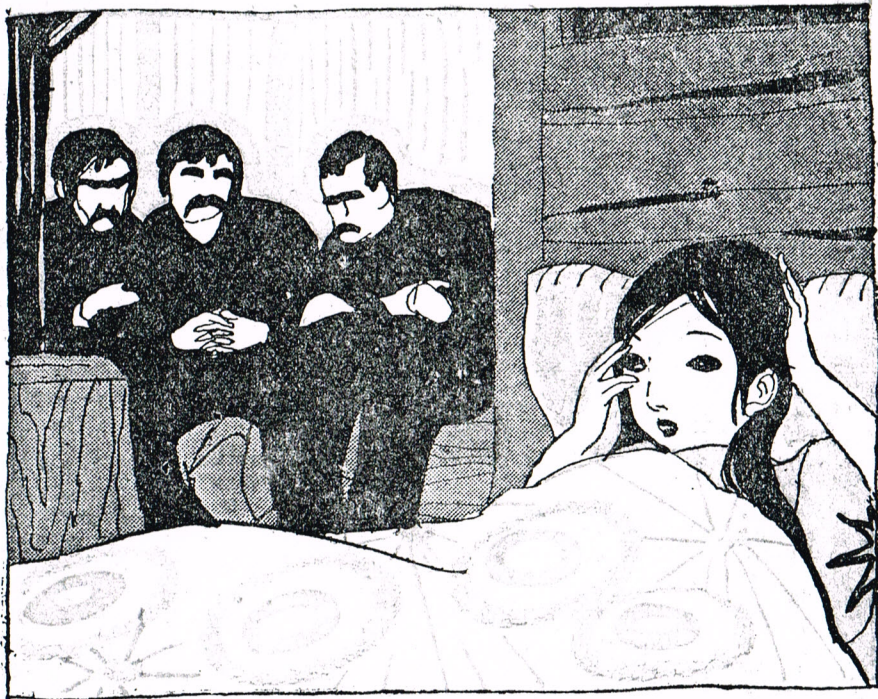
けれども、男達の目玉は光つて居ない、鬼のやうな角もない、たゞ顔と云はず頭と云はず毛だらけで髯むくじやな點が、似て居るだけである。

とは云へ、燕嶽の父様を訪ねて、頂上に駒草を探し歩いたのは夢ではない、過つて烈しい斜面を數十丈の谷底に轉がり落ち、熊に出合ひ、目玉の光る鬼のやうな怪物につかまれたのも、たしかに夢ではない筈である。

百合子は今一度男達を見直した。見ても見ても男達の頭には、一本の角らしいものも生えてはゐなかつた。

「山賊ではあるまいか。」  
續いて斯うした不安に  
襲はれたほど、男達の頭  
髪は亂れてゐた。自雷也  
だの、石川五右衛門だの  
芝居で見る悪黨の冠る千  
日かづらそつくりの毛む  
くじや頭であつた。百合  
子は怖さ心細さに思はず  
知らず涙ぐんだ。

「まだ氣分が落付かぬや  
うだから、お前方は暫ら  
く彼方へ行つといで。」  
と、中でも大將らしい一  
人が云ふと、一同は一寸  
會釋して出て行つた。百  
合子がそつと四邊を見廻  
して様子を窺ふと、天井



のかゝりから窓の具合  
など、どうやら岩窟ら  
しく見受けられた。而  
も、この大廣間の外に  
まだ、澤山な部屋が  
あつて、大分大が、り  
の岩窟と思はれた。  
「お嬢さん、御安心な  
さい、此處は以前、す  
つと昔は山賊の山寨で  
したが、今では私達の  
棲家です。」

毛むくじやの男は斯  
ういつて、靜かに椅子  
を引き寄せ、ベットの  
側に腰掛けた。  
毛むくじやらでこそ  
あれ、男の顔は決して

野卑ではなかつた。面長な、額の廣い、鼻筋の通つ  
た、おまけに何處やら上品なもので、しかも言葉の  
具合から、一途に悪人とは見えなかつたが、それで  
も百合子は氣を引きしめて、すこしの油斷もしな  
かつた。

「ハッハッ、あなたは私達を怪しいものと思ひな  
のでせう。」

百合子は圖星を指されて赤面した。そして何と返  
事をしたものか解らないので、たゞ黙つて俯向いた。  
「無理もない、鬼だと思つたでせう、併し昨夜の角  
は護身用です、目玉だつてその通り。何しろ此處は  
日本アルプスでも、昔から滅多に人間の來ない處で  
すから、自然熊だの狼だの、いろんな猛獸が出て  
來ます、奴等は人間だと見ると飛びかゝる、それを防  
ぐには奴等から人間だと氣づかれないのが一番だ。  
私は山男には角があるといふ昔からの云ひ傳へから  
思ひ付いて、鬼のやうな角を生やし、夜分の外出  
にはきつとアセチリン瓦斯の目玉を用意する事にし

たのです。すると、果して猛獸共はえたいの知れぬ  
姿に驚ろいて逃げ出します。御覽なさい、昨夜の熊  
だつて、あんなに周章で逃げたぢやないか。」  
「まあ左様！」百合子はホツとした。そして急いで  
ベットのの上に起き上り、キチンと襟を合して手を突  
いた。

「小父様、有難う御座いました。」

お蔭で命が助かりました、それとも知らず今の今  
まで悪人かと疑つてゐて濟みませんでしたと、いろ  
んな事が云ひたいのだけれど、百合子はたゞ一言、  
心からのお禮を述べたきり、ハラハラと玉のやうな  
涙を落すばかりであつた。

「いや、お禮には及ばない、私はたゞよい處へ通り  
合せたのでした。だが、一體お嬢さんはどうしてあ  
んな危い事になつたのです。」

百合子はすつかり事情を話した。

「なる程、燕嶽の頂上に、この頃變なものが出  
來てるやうだと思つたが、フーム、高峰博士が氣象  
(77)

研究所を建てたのか、フォームなるほど。」

「小父様、此處から父の許まで、よつほど遠いので御座います、せうね。」

「左様、かなりある、けれども御安心なさい、明日にも送らせてあげませう。」

「え、小父様！」

百合子は飛び上るほど喜んだ。

「先刻此處に居た

毛むくじや男は、みんな私の部下です。

ハツハツハ、部下なんて

言葉を云ふと、何だか山賊

めいていけないが、云はゞまあ助手ですよ。だから、あの男達二三



人を附けて燕嶽の父様の所へ送

つてあげる。」

百合子は改めて頭を下げた。

そして、

「小父様は此處で何の御研究を遊ばしてらつしやいますの？」と訊いて見た。

「ハツハツハ、

何の研究、いやあなたは高峰博士

の令嬢だ、私の研究を訊かれるのも道

理だが、併しお嬢さん、

私は怪しいものではない、今から十五年前、或る目的を持

つてこのアルプスの奥深く入つて来た

ものだと云ふ事だけ申し上げます。」

百合子はそれ以上に訊く必要もなかつた。折柄岩窟の外で騒々しく騒ぎ立てる音がした。何事かと聞き耳を立てると、毛むくじやの人は云つた。

「また鷹が出て来た。鷹の奴、無暗に雷鳥を捕みたがつていけないから、みんなで以てあべこべに退治てゐる處でせう。」

「アラ危い、間違つて眼を突き刺されると大變ね。」

「大丈夫、お嬢さんも明日はもう燕へ歸るんだ、お土産に鷹退治でも見てらつしやい、さあ小父さんと一緒に行きませう。」

百合子はベツトを下りて一緒に連れ立つた。

x

燕嶽の氣象研究所では、高峰博士をはじめとして多くの助手たちも、百合子はもう死んだものとおきらめてゐた。死んだとしても、せめてその死骸だけでも捜し出したいと思つて、深い谷底へおりてゆく方法を、いろ／＼と相談してゐた。

そこへ百合子が、ふしぎな角のある人に送られて歸つてきたので、みんな「萬歳」の聲をあげて喜んだ。「百合子！ よく生きてゐたねえ、一體どうして歸つて来たのだ。」

と、父博士は百合子を抱きあげながら尋ねた。

「お父様、ほんとに私、どうして助かつたか、自分でもふしぎでなりませんの。それに一度は、熊に喰ひ殺されようとしたんですもの。でも、幸にこの方に助けられたんですよ。」

百合子は斯う言つて、傍の角のある人の手を取りながら、父博士に委しい物語をした。

だん／＼話をきいて見ると、角のある人も高峰博士と同じやうに、この山の中で氣象を研究してゐるのであるといふことが解つた。そして、猛獸を怖れさせるために、わざと髯をもちやもちやと生やし、角のお面を冠つてゐるのだといふことも解つた。

燕嶽の頂では、百合子が生きて返つたので、盛んな祝賀會が開かれた。

—(をばり)—